

# 赤楽火鉢

2010年3月15日から4月30日まで、京都工芸繊維大学文化遺産教育研究センターの企画、美術工芸資料館主催で展覧会「浅井忠と京都 1900年～1907年」を開催した。その展覧会の出品作品のうちの一点が美術工芸資料館に寄贈されることになった。今回はその作品を紹介しつつ、展覧会の成果を踏まえて、京都時代の浅井忠の活動を振り返ってみたい。

寄贈された作品は「火鉢」(図1)である。火鉢と伝承されてきたようだが、実際のところは判明しない。手焙り火鉢と呼ばれる個人用の火鉢である可能性はあるので、ここでは火鉢としておこう。

この火鉢、口径は23.9cm、高さは29.4cmのほぼ円筒形であり、口の部分にやや厚みをもたせている。一部に欠損があるものの、ほぼ完成品である。赤楽焼で、作風から見て、浅井忠が京都で活動した1902年から1907年という時期に製作されたと考えても問題はない。この火鉢を浅井と結びつけるのは、側面に刻された二つの刻印である。ひとつは、浅井の「木魚」で、他は、浅井が最晩年に開いた陶器店九雲堂を示す「九雲」である。この両印について見ていこう。

まず「木魚」。浅井は京都時代のおもに日本画作品に「木魚」印を用いている。印材に「木魚」と刻された印のほか、美術工芸資料館所蔵の猪図(文箱図案、AN.3439、図2)に使用されている「木」字と魚の形状を組み合わせた印も用いる。浅井が「木魚」印を用いた理由ははっきりしないが、号である「黙語」と音が近いからではないかと推測されている。「木」と魚のかたちの印は、書き印としてみずから画中に書き込む場合もある。



図1

火鉢に刻まれた「木魚」印は、およそ11.3cm×11.1cmの大きなもので、日本画に用いられている書き印と比べても類を見ない大きさだ。陶土におそらくはへらなどを用いて彫ったものなので、その形状を比較して真贋を判断することはできない。しかし、日本画に書かれた「木魚」印と比べて、とくに偽印と考えなければならない点も指摘できない。

一方の「九雲」印を見てみよう。これも同じく陶土に刻まれた方印で、大きさは10.9cm×11.0cmである。この印もその大きさのため、同種の印と比較することは難しい。

以上のように、この火鉢は、印の比較は難しいものの、九雲堂を開いてみずからの作品を販売しようとした浅井の作である可能性は高い。

ここで、京都時代の浅井について概観してみたい。

東京で洋画家として活躍していた浅井が京都高等工芸学校に赴任したのは、1902(明治35)年である。パリ万国博覧会視察のためにフランス留学をしていた浅井は、世界の新しいデザインの潮流に衝撃を受けた。そして、折しも京都高等工芸学校設立準備のためにパリを訪れて

いた中澤岩太の招きを受けて、京都に拠点をうつし、本格的に図案家としての創作と教育を開始した。彼は教壇での指導にくわえて、陶芸家と遊陶園を、漆芸家と京漆園を立ち上げて、図案の研究をおこないながら、さらに、みずからの創作した図案を製品化したいと考えていた。それを実現したのが九雲堂である。

九雲堂は、浅井みずから陶器の図案、絵付け、販売を手がける店で、八坂神社近くの袋物専門店「香鳥屋」のある場所(現在は道路上)に開店したという。みずからのデザインした陶器を売ることは、パリから帰国した段階ですでに思い

描いていた。

九雲堂については、従来、本格的な研究はほとんどなされていない。その理由のひとつは、浅井が直接九雲堂にかかわった期間が短かったという点にあるが、同時に、芸術家としての浅井、教育者としての浅井を語る視点からは、商売という観点が入る九雲堂の活動は取り上げにくいという点もあったと考えられる。しかし、浅井の京都での活動を考えるにあたっては、九雲堂の活動ははずすわけにはいかない。以下では、今回の展覧会で借用することができた浅井忠の九雲堂開店に際しての口上書(参考図版)を読み解くことにより、九雲堂の活動とその準備段階での浅井の気持ちを推測してみたい。

浅井の口上は、以下のとおりである。

「京都の陶器とて名声の高きにも係らず、さて改良進歩の跡なく旧型模倣に止まって陳腐なるものとなり。或は又輸出向の卑俗なるものとなり大方の愛顧に酬ふるに足らず。これを弊堂の深く憾みとなす処にして微力これを恢復せんことを欲し、試験を重ねること茲に数年。幸に精良なる品質を作る



図2



参考図版 口上書 浅井忠 個人蔵

ことを得たれば、今回美術諸大家の賛助を得て斬新にして高雅なる意匠図案によりて質文相待ちて優美高雅なる珍品を製造し、聊か新興国の面目を全ふし、京都の名声をして益々四方に輝やかしめんことを期す。希くは続々御来堂ありて実物御一覧の上、世間ある処のものと自ら其撰を異にしたることを御認めありて、御愛顧の栄を賜はらんことを乞ふ。」

「又、傍ら漆器の改良をも期し、尤も新式にして奇抜なる。しかも堅牢にして高雅なるものを蒐集し大方の御高評を待つこととなせり。是又一部の御愛顧あらんことを希ふ。」

ここで浅井は、京都の陶器業界が伝統に固執するあまり、新しいデザインの潮流を受け入れず、さらに、輸出用の安易な製作に力をそそいでいることを憂慮していた。試験を重ねるこ

とは遊陶園や京漆園での研究活動をさすが、この二園での研究をもとに、浅井は高品質で斬新なデザインの作品を誕生させ、九雲堂をとおして広く世間にその是非を問おうとしていた。この口上からは、浅井の決意と自信のほどがうかがえる。

残念ながら九雲堂の活動は、開店後三ヶ月という1907年12月に浅井自身が急死したことによって急速に勢いを失った。しかし、同時期の京都では、やはり図案の改良に力を入れる京都瓢池園が設立されるなど、図案革新の大きな流れができており、浅井と九雲堂が果たした役割は決して小さくはない。

執筆著:並木誠士、和田積希  
(文化遺産教育研究センター)